
短編集

ヨヌフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N9157X

【作者名】

ヨヌフ

【あらすじ】

実験的な短編集。思いついたら更新。

一回掲載ミスして、しょんぼり。

犬

底に手が届くような澄み切った湖。

その湖に棲む魚達もその場に溶け込むかのようにガラスのように透き通っている。

全てが透き通りその全てを世界に曝そうとしている様な湖が其処にはある。

しかし、その湖の底にいる生き物。

その生き物だけはそれに逆らうかの様に、湖の中でただ一匹だけ確かな色を持って存在している。

それは一匹の犬である。茶色い毛皮の普通の犬が然も当然といった感じで湖の底を歩いている。

彼は湖の生態系の頂点であったが、その湖の王ではない。

彼は気ままに湖の底を歩き回り、時に魚達を捕食した。

魚達は言う。何故彼は醜い姿を曝して平気なのだろう。色を持つなんておかしい。

魚達にとって彼は脅威であったが、排斥すべき存在でもある。

犬は言う。何故彼らは姿を持たないのか。自らを知る事すら出来ないではないか。

犬にとって彼らは餌であり、必要な存在である。

長い時を経てやがて犬は死んでしまった。

底が見えるほど透き通った湖があった。その湖は今もう無い。

犬（後書き）

風刺を組み込んでみた。いかがだったでしょうか。感想や批判、何か意見があったら暇な時にお書きください。待っています。

ものくろーむ（前書き）

現代モノ プロローグだけみたいなヤツ

ものくろーむ

僕の世界はモノクロだった。

その事に初めに気付いたのは僕の母だった。言葉を教える際に色ひんぼんを頻繁に間違える僕に不審の念を抱いたらしい。本人に言わせると母の愛が気付かせてくれたという事らしいが。

兎に角、何か変だと思った母は僕を病院へと連れて行くと僕が色を認識できていないのではないかと医師に訴えた。医師の方は単に僕が幼いからまだよく分かっていないんじゃないかと説明してその時は母と僕を家に帰らした。

しかしその一ヶ月後、僕に色んな言葉を覚えさせた母は病院に行き、こんなに言葉を憶えているのに色だけは間違えてしまうと同じ医師に訴えた。母の意志の強さと二歳を過ぎて色んな言葉を覚えているのに色だけは間違える僕に医師も流石におかしいと感じたのか、詳しく検査する事にした。

検査の結果判明した事は、確かに僕は色を濃淡でしか認識できていない事、ソレ以外はいたって健康な子供であり異常は見られないという事である。

医師によると網膜にある視細胞などの眼の周辺に異常は見られなかったため、脳の視覚野や前頭葉などの受け取った色の情報を処理する所に原因があるのではないかという事らしい。

検査の結果を知った母は医師に治す事はできませんかと聞いたが、医師からしてみれば原因すら分からないのに治せるわけがないだろうという気持ちだったろう。まあ医者も商売なのでその医師は僕の

視覚の異常は原因が分からないので治せないという事をオブラートで包んで伝え、そして目は見えており濃淡は認識できるようなので頑張れば色の違いも見分けられるのではないかと希望を母に与えた。

その医師の発言の所為で母の僕に対する教育方針が決まった。

その日からの母は僕に色の違いを見分けさせようと奮闘した。まずは赤と青と黄色。それが終わったら緑と紫と白と黒。そうやって僕に頑張って色の違いを憶えさせようとしたらしい。

だがそんな母の頑張りもむなしく僕は色の違いを見分ける事が出来なかった。しかし僕の三歳の誕生日から二ヶ月ほど過ぎたある日を境に僕は急に色を見分けられるようになった。

最初の頃は偶然が続いただけだと思っていた母だが、正解が二十回ほど続き七色の見分けも完璧に出来た所で色が見分けられるようになったと大喜びして大泣きしたらしい。

あんなに泣いて、あんなに喜んだのは出産の時以来だと今でも母は僕によく話してくれる。

閑話休題。かんわきゅうだい兎に角、今現在の僕は視界の殆どが白と黒のツートンである以外は至って善良で健康優良児でもある高校一年生だという事だ。

「だから、先輩。そんな風に育ててくれた母に申し訳なくなるので殺すとかやめてください」

「黙っていやがると思ったらいきなり何言ってるんだお前は？」

「いやあ、こんなシュチュレーションの時はよく「殺すぞ!」とか「生意気な目しやがって!」とか「馬鹿かお前は?」とか言われるもので」

そんな僕は体育館裏で怖そうな先輩と二人っきりと言うベタな状

況に陥っているのであった。

「……お前が何考えているのかは分からんが。まずはその腐ったナマケモノのような目をやめろ」

「腐ったナマケモノとはベタじゃない様でベタベタですね。残念ながら僕はそんな評価を百回は確実に受けています。よって先輩の表現はすでに定型句として僕の心の内にあります。よって先輩の今の発言は僕の心の内にある役所で届出を却下されました。次からはちよつとひねりを加えてください」

「……お前はもしかして俺に喧嘩売っているのか？」

先輩は額に青筋^{たぶん}浮かべて僕に話しかけてきた。何かおかしな事を言ったかな？僕としては普通に受け答えしたつもりなのだが。これはどういうことだ？

「あれ？先輩の方が喧嘩売ってきているんじゃないんですか？」放課後、体育館裏で待ってる。逃げるなよ」なんて言われたら僕には喧嘩を売られているとしか思えないんですけど。まあ先攻は譲りますよ、それをビデオカメラで撮影して正当防衛の証拠にします。そして僕が勝ったら先輩を恥ずかしい格好にして携帯で撮影して「この画像を消して欲しければ×××の格好で○○○○しながら」俺は本当は■■■■の□□□です」と言え。さもないとご近所さんにこの画像をばら撒く」と脅してやる。さあ、かかって来なさい」

「…ッ！！何言ってるんだお前は！！……まったくお前は昔から外見は目以外は可愛いのに、腹黒の外道だよなあ！お前は俺の事おぼえて居ないのか？」

怒鳴って頭に血が昇ったのか顔を赤く（おそろく）しながら記憶の所在を訊ねてきた先輩。しかし僕にはこんな知り合いはいなかったはず。全体的に整っている顔立ちだが眉も細ければ目も細くて鋭

く、唇も薄い為に怖い人の雰囲気。髪型はストレートの腰までのロングヘアーで、背は高く足が長い所謂モデル体系。それが合わさって生まれるイメージが何故か狂犬。……やっぱり僕にはこんな知り合いはいなかった気がする。

「……うーん。僕に君みたいな怖い女の子の知り合いはなかった気がするんだけどなー」

「怖ッ!?!……え? 俺 お前に 怖いって…… え?」

「ん? ちょっと待って何か思い出せそうな気がする」

嘘を言ってるかもしれないからとりあえず警戒だけはしておくとして。……えーと本当のことを言っているとすると。「昔から腹黒の外道」とか言っていたから僕の昔の知り合いで、尚且つ俺口調の怖い雰囲気の子で一歳年上。

いやでも生きていれば成長するわけだから今の姿から若返らせれば分かるかな。今の背の高い姿を幼稚園児くらいに縮めて、胸と尻とかを引っ込ませてツルペタにして、顔のパーツにも子供特有の丸みと柔らかさを加える、最後に髪を切ってから子供服を着せて上げれば。……あ!

僕が閃いた事を感じ取ったのか、暗黒面に堕ちてぶつぶつ言っていた先輩（もしかしたら幼馴染）さんは最後の希望を見つけたという表情に変わり、縋る様な潤んだ瞳で僕を見つめてきた。正直言うて怖い。

「もしかして……君は……よくお家で遊んでいたあきちゃん?」

「……ゆう君のバカヤロー!!!!」

またうつむいてプルプル震えたと思ったら悲痛な叫びと共に殴りかかってきた。腰の入った右ストレート。このままだと僕の顔面直撃コース。

お腹だったら甘んじて受けたんだけど顔面は後々まずいので間に手を挿^{はさ}んでガード。成功したがちよつと痺れた。いいパンチだと褒めてやりたいがそれは次の機会にして。パンチを防がれて呆けている先輩に昔^{……}みたい顔に顔を近づけて改めて挨拶。

「嘘だよ。久し振りだねはるかちゃん」

「ッ………クッ……死ね」

絶対零度の冷え切った声と共に放たれた二度目のパンチは内臓を抉り取るようなストマックブローでした。ものすごく痛かった。

先輩……いや、武藤悠^{むとうはるか}は僕をKOした後、すこしの逡巡を見せてから無言で走り去って行った。KOされ倒れ伏した状態のままの僕に老若男女様々なバリエーションの幻聴が聞こえる。だが声のバリエーションと違い内容はどれも大体一緒だった。幻聴曰く。

「今のは無い。死ね！——今のは無いのう。腹を切れ——死んだ方がいい——

「……皆、僕に暴言吐きすぎだろう。さっきのは全部、僕のお茶目な冗談だよ」

「一女の気持ちを弄ぶな、余計に死ね！——性質が悪いのう、死ぬが良い——生き返ってもう一回死ね——

「分かった分かった、僕が悪かった。今度会った時しっかり謝るから、勘弁して」

僕の謝罪宣言を受け入れたのか僕の周囲に居た人達は大人しくなった。

彼等こそ僕の視界が殆どが白黒といった原因。僕のモノクロの世界に乗り込んで色を教えてくれたフルカラーの住人だ。先程も言ったように彼らは老若男女様々な人々の集まりで、尚且つ衣服もバラバラ、その上何人か外国人も混ざっている。そんな彼らの共通点は僕から見ればフルカラーで見えること―こと、その姿は他の人には見えないこと、その声は他の人には聞こえない事、物をすり抜けられること。

そして最後にもう既に死んでいること。つまり彼らは俗に言う幽霊なのだ。

「……まさか泣くとはね。明日プリンでも作って詫びに行くか」

幽霊を除いて世界がモノクロ見える以外至って健康な高校一年生の僕は、この日から二週間後仲直りした悠が持ち込んできた厄介事が始まりとして変わっていった。

ものくろーむ（後書き）

主人公の名前は月岡^{ツキオカ} 優^{ユウ}。

この後は巫女さんとかシスターとか出てくるドタバタ時々シリアス系になる予定。メインヒロインはハルカと美人な幽霊になる。幽霊ズの中には山簗りの末に死んじゃった武人の爺、西洋映画のテンプレ的な陽気な黒人、とかいろいろいる。

魚

「……こうやって毎日見ているが、今でも人類全てが幻覚を見ていると思いたいね」

そう呟いた彼が見ているのは魚。Caranx lugubrisに似ているが目の周りの模様や鱗の形、体の微妙な具合などいろいろ違うので新種の魚だ。と短縮したが概ねその様な事を魚好きの親友が熱く語ってくれた。

その後に図鑑で調べたまじめな彼だが「その違いが分からん！」と二時間程見比べてから叫んだ結果。両手足を椅子に頑丈そうな紐で縛り付けられた後数時間にわたって、事細かなその魚とCaranx lugubrisとの違いを映像と親友による解説・豆知識付きで頭に叩き込まれた。ちなみにCaranx lugubrisとはカッポレの学名である。別名イシカワギンガメアジ・クロヒラアジ・ヒラアジなど。

体は長い楕円のよう、縦が長くそれに比べて厚みは薄くて平たい。額はギンザメアジ属としては高くて角張っている。体色は緑褐色で、銀色光沢が鈍く全体的に黒っぽい。側線と言う水中で水圧や水流の変化を感じとるための器官は体の半分的位置から尾ひれの付け根まで真っ直ぐ伸びている。その側線の上にある稜鱗は大きく、そしてはつきりと黒いので目立っている。ひれは全体的に黒く。胸びれや二番目の背びれの前端、尻びれ前端が鎌状に伸びていて、尾ひれも大きい。ただし二番目の背びれと尻びれは白く縁取られている。

「……だが、やっぱりそこまで大きな違いは無いから別にいいと思うんだがね」

その魚に関する知識を頭に叩き込まれた彼は、それでも親友にまた監禁されるような事を言った。

「それにそんな知識無くても、一目見れば違う事位分かるさ」

彼はそう言って今まで覗き込んでいた物から目を離す。

その物とは天体望遠鏡。それを覗き込めば月の光を浴びて銀色に輝く物体、全長6000Km程の大きな大きなカッポレに良く似ている魚が宇宙空間を自由自在に泳いでいた。

和名はウチユウカッポレモドキ。一時期全世界を騒がせたが、今ではぬいぐるみまで作られている人気者だ。

魚（後書き）

クリスマス☆イブに何書いてるんだろう。でも書きたかったから書いた後悔はしていない。……していい筈。きつと。たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9157x/>

短編集

2011年12月24日01時00分発行